

トル教徒を指したれ、後には他の基督教徒にも之を  
延用して、宋史にはビザンチウムの基督教徒を指し、  
明代には羅馬法皇をも指すに至れるなり。

(明治四十三年十月 池内 宏)

## 阿育王論 第二版

ヴェンセント・スミス著

Asoka, the Buddhist Emperor of India.

By Vincent Smith. 2. ed. Oxford. 1909.

此書は印度統治者の史傳を各別に一卷宛として出版せる *Rulers of India* の一卷にして、印度の史的研究を以て名あるスミス氏の著はず所、考古學・史學・梵語學等より得たる阿育王關係資料を總合して阿育王の史傳となしたるものなり。阿育王の史傳に關する研究には岩面敕文并に石柱敕文の如きものありて

是が解釋に就て學者の間に異說少からず。文書上の史料に於ても、梵語・巴利語・漢文の所傳ありて一致せざるもの多く、學者亦各其の採る所を異にするが爲に、阿育王論の出づるや、之に對する學者の注意を惹起し、英國のトーマス、佛國のセナー等諸氏の批評出づると共に此等諸氏の最近意見をも聞くを得たり。スミス氏は此等の最新意見并に自家の新研究を參酌し、一九〇九年を以て更に阿育王論の第二版を公刊す。名目は再版なれども増訂の部分少からずして一新著の觀あらしむ。

此書は叙事を主とする普通史書に非ずして、寧ろ正確なる史料の英譯を供給し、并せて南北所傳の史實を纂譯せり。本書の特色は阿育王岩面敕文并に石柱敕文を英譯一括したるに在り。阿育王の敕文全部を公にしたるはクマール・スワームィ氏の書あれども、今容易に得難く、吾人が得易きものはスミス氏の阿育王論あるのみ。

記録梵文史類に依りて行政を説明す。

第三章 記念塔碑 四二頁

研究を爲し、奇抜の意見を出せりと雖とも、ス氏は論證の典據として寧ろ吾人が採用すべき南方所傳の史料を排斥し、反て史料としての價值少き北方所傳の傳説を採用せしが如きは吾人の首肯する能はざる所なり。第二版の阿育王論には稍之を改めたる部分少からずと雖も、印度佛教史研究の方針として尙奇を好むの弊あるを免れず、是れス氏名著の瑕瑾なり。

本章は印度錫蘭に傳ふる史傳、法顯・玄奘等支那高僧の紀行、最近西洋學者の研究に依りて、阿育王の佛塔建立、阿育王時代の造形美術を論じ、岩面・石柱・敕文の概論を爲し、終に石柱敕文の所在地を指示せり。

第四章 岩面敕文 三二頁

阿育王論第二版の内容を擧ぐれば左の如し。

阿育王舊領に存する各地の岩面敕文を一々英譯し、脚註に其考證を出し、最近學者の研究を網羅す。

第一章 阿育王の事蹟 六三頁

第五章 石柱敕文并に雜種刻文 二二頁

阿育王の誕生より死亡に至るまでの事蹟を叙述研究し、南北史傳を比較し、マウリヤ王朝年表を附加せり。本章は初版に比して精細なると共に遙に進歩したり。

同一の方法に於て石柱敕文并に諸種の刻文を英譯考證す。

第二章 阿育王の領域及政治 三一頁

本章は、岩面敕文・石柱敕文の散在區域并に梵漢文

第六章 阿育王に關する錫蘭の傳説 一五頁  
錫蘭の島史并に古史に傳ふる阿育王の傳説を録し是が考證の要領を掲ぐ。

書に基きて阿育王の領域を定め、マガステネスの

第七章 阿育王に關する印度の傳説 二二頁

阿育王史傳(Asoka's History)其他梵語文書に傳ふる傳説を叙述詳論せしものなり、更に之を漢傳の阿育王經・阿育王傳に比較すれば、更に興味あるべしと信ず。

(堀 謙 徳)

## 中央亞細亞にけるモハメット

### 教徒の靈拜

アウレル・スタイン述

Note on Biddhist Local Worship in Muhammadan Central Asia. By Aurel Stein. (Journal of The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland. July, 1910.)

予の中央亞細亞探檢に就いて述べ可きこと頗る多し。嘗て第一次の探檢に於いて、新疆省于闐地方に

行はるゝ、モハメット教徒の信仰の古習に就いて叙したる所ありしが、尙同地方の考古學上の方面に就いても精確に報導し得るものなきに非ず。古代西域に往復せし支那の僧侶殊に唐の玄奘三藏の如き人々が其の往復の徑路に残せる遺物遺跡は、十分に之を證する資料となるものなり。然れども當時佛僧が記念す可き地點として後人に記し残せるものは、多くはモハメット教の堂宇に聯關する物語 又は其の教徒自身の口碑傳説となりて傳へられつゝあるは特に注意すべきことならん。(拙稿 Ancient Khotan, vol. I, Index) (V. P. 611. 參照せよ)

更に今地質の方面より于闐地方を觀察するに、その地殻は一帶に巖石を含有せず。従つて建築彫刻用として石材を得るに由なく、堂宇の構造、總べて木材、粘土或は煉瓦などの如き耐久の性質に乏しきものを以つてするの止むなき故ありと云ふべし。これは同地方の古代建築物が原形を失はずして今に残ることの難きは察するに餘あり。(Ancient Khotan) 之に反